

ガーデニングと植物名

どんな目標にせよ、ガーデニングを始めれば、いつまでもまとわりつく難題は植物の名称。外国から新しい植物や改良種が次から次へと持ち込まれるせいか、あるいは花卉がワールドワイドで流通しているせいか、和名は肩身が狭くなりつつある。子どものとき百日草と覚えたのに、今はジニア。ナデシコ（撫子）もダイアンサスが幅を利かせつつある。両方とも学名由来だが、ダイアンサスは英語風の発音で、ディアンツスとも言う。ただ学名（属名）を使うのは、和名がないときとか、石竹やナデシコ類とカーネーションをダイアンサスとして一括記憶するときには便利である。名称対策としてわたし自身は、主にプロ向けの「日本花名鑑、1, 2, 3巻」（アボック社）を愛用している。

名称の難関から逃れる方法の一つは、冬から春はパンジー、ビオラ、プリムラ、そのあと夏から秋はペチュニア*、日日草、ヒマワリ、コスモスなどを植え、「時流」に身を任せることである。これだとせいぜい品種名を覚えればよいし、安価な苗が大量に売られているので苗を育てる手間も省ける。（*ペチュニアは、大企業が独自に育成した品種に登録商標名がついている）

もう一つは、庭仕事一切を造園業者に任せてしまうこと。金はかかるが、植物名抜きで注文をつけることができる。造園家がこちらの言い分を斟酌してくれる。

しかしこれらの手を使うと、イングリッシュガーデンに見られるような、定式のない「自然さ」を演出できない。パンジーやペチュニアだけをまとめて咲かせては、きれいであっても「自然」らしくない。もし個人的に「自然なガーデン」に挑戦するなら、植物の名称への理解は避けて通れない。

ある土地に「自然なガーデン」を立ち上げるには、植物の背の高さ、容姿、葉の形、常緑・落葉の区別、一年草・多年草などの区別、花の色、形、大きさ、開花時期、耐寒性・耐暑性などの気候特性、日照や土壌に対する特性など、無数とも言える条件を考えながら、多くの植物を選ばなければならない。机上で園芸植物を選ぶとき、通信販売のカタログや「日本花名鑑」が役に立つ。とくに日本における植物耐寒ゾーン（注）を示すマップと各植物のデータが、「日本花名鑑」に載っている。（注：植物の寒さに対する露地植栽可能なゾーンをハーディネスゾーン=植物耐寒ゾーンという。特別な防寒設備を施さなくても、冬の寒い季節を生き延びられる目安である）

だが、問題は机上のプランで終わらない。第一に、植物の容姿、花の付き方、植物相互のバランスなどは、実際に植えて、自分のセンスで確かめないといけない。前もって図面に描いても、よほど博学でないかぎり結果を予測できない。第二に、苗を別に用意して全取替方法を使わず、ガーデンで「自然」な季節の移り変わりを表現するには、植物がどう生長し、どう枯れるかも知らないといけない。第三に、ガーデン周辺の局所的な気候を知らねばならない。同じ県内でも、標高とか、地形の違いがある。

そこで、ひとの庭を覗いたり、周辺の植物を観察して、さまざまな植物の人為的でない容姿や地元における花期などを探る。ここでも植物の名称が分からないと、その植物が気に入っても買うことができない。苦し紛れに写真撮影を行い、図鑑などで名称を探すが、簡単な特徴から植物名を索引する資料がない。

かくて続く。ねえ、「君の名は？」
